二〇二六年二月一四日

離してもくつつきたがる餅焼くる　あひる
下萌を縫ひて潤す忘れ水　むべ
広野ありグラデーションに草萌ゆる　えいじ
立春の光に弾む野川かな　よし女
洞深き老幹なれど梅真白　うつぎ
深雪踏み鳴らしつ下る女坂　むべ
ふらここの少年ひとり唄ひをり　もとこ
ケーキ焼き施設の夫へバレンタイン　やよい
青空に雪庇の雫光りをり　ほたる
幼な手が鈴の緒揺らす梅の宮　風民
老夫婦相杖となり梅を愛づ　きよえ

二〇二六年二月一三日

日の畑におしくらのごと草萌ゆる　よし女
我が庭の鉢といふ鉢下萌ゆる　うつぎ
常磐木の秀枝より落つ雪解かな　むべ
夕映のそらに道あり鳥帰る　澄子

二〇二六年二月一二日

枯野へと届く天使の梯子かな　あひる
蕗の薹出るはこの辺踏まぬやう　うつぎ
石橋の裏にかぎらふ春の水　せいじ
木々の影廊下に届く春日かな　千鶴
葦の間に見え隠れすは恋の鴨　風民
老幹の大きな洞に雪残る　よし女
春の海波のひかりを縫ふ小舟　藤井
間遠なる潮騒の楽春隣　やよい

二〇二六年二月一一日

大空へ千手を翳す大冬木　山椒
芝庭の起伏のままに雪残る　澄子
春寒し引戸の機嫌悪るかりし　よし女
千本の鳥居に通ふ木の芽風　康子
雨雲の切れ目よりさす春日かな　きよえ
目を閉ぢて梅の香に佇つ一詩人　むべ
下萌に野井戸のしるし杭一つ　うつぎ

二〇二六年二月一〇日

主峰なほ雪を被きて春寒し　花茗荷
水神の砦となせる枯木立　山椒
ちちははの遺影にならべ雛飾る　あひる
ゆつくりと池畔離るる薄氷　むべ

二〇二六年二月九日

雪雲の切れ目切れ目は群青に　よし女
廃船の水漬きしままに春寒し　花茗荷
旅の途に残す笑顔の雪だるま　あひる
ラグビーのルールも知らず妻叫ぶ　愛正
春雪の宮居うす絹広ぐごと　よし女
あひ並ぶ陶の狸と雪だるま　うつぎ

二〇二六年二月八日

花鉢に氷菓のごとき雪の嵩　あひる
雪だるま溶けてトトロとなりにけり　うつぎ
春寒の浜に伏せある伝馬船　花茗荷
この家の子の数と見し雪だるま　康子
雪のせて見得切る松の男ぶり　風民
雪礫教会前を飛び交ひぬ　むべ
実南天雪を払ひて立ちにけり　董雨
春雪にお気をつけてと朝市女　なつき

毎日句会みのる選・二〇二六年二月一六日